

玉田独步全集

第四卷

学习研究社

國木田獨步全集 第四卷（第七回配本）

G 六四三〇四

昭和四十一年二月十日第一刷發行

昭和四十四年八月十日第四刷發行 ©

定價 千五百圓

著 者

國 木 田 獨 步

編集者

國 木 田 獨 步 全 集
編纂委員會

發行者

古 岡 秀 人

印刷者

矢 島 貞 雄
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
長野市西和田四七〇

發行所

株式會社 學 習 研 究 社

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
電話（七二〇）一一一一
振替 東京 一四二九三〇

小說三

翻譯

•

翻案

目 次

小説 三

泣き笑ひ	九
疲 勞	一九
窮 死	二七
都の友へ、B 生より	四二
湯ヶ原ゆき	四七
都の友へ、S 生より	五五
暴 風	五七
節 操	一一
渚	一一
竹の木戸	一三
二 老人	一五

翻譯・翻案

童兒の星の夢		一七一
絲くづ		一七九
非凡人		一九一
寶		二三七
怠惰屋の弟子入り		二四五
騙術の妙		二五三
大飯喰ひ		二五九
那因果物語		二六三
支那奇談 黒衣仙		二六九
支那小説 舟の少女		二七七
支那物語 三騙術		二八七
支那物語 石清虛		二九五

支那姉と妹 三〇三

支那髯 漢 三二一

宿營の二夜 三二九

女丈夫 三三三

決闘家 三五七

愛國者 四三三

人生 四五三

解題 瀬沼茂樹 四五九

主なるヴァリアント 四九四

小說三

泣
き
笑
ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刻千秋の思で待て居る。

『又た彼の魯鈍のことだから、のろくさ／＼して居るのだらう、眞實に仕様がなないねえ』と大焦燥に焦燥れて居る。

するとお光は果して頗る香氣に、鼻歌でも唄はんばかりの様子で歸つて來た、と母親には見受られたのである。いきなり

『お光！ お光！ お前何をくず／＼して居るのだねえ、眞實に！』

『へえ。』と年は十七ばかりの、孤兒なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中が、眼をパチクリ／＼、奥様の顔を眺めて居る。

『へえ』もないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。』

『へえ、片山の坊様は歸宅つて居ました。』

『そんなら大村の坊様は？』

『歸宅つて居ました』

母親は迫込んで、

『そんなら我家の坊様は如何したか尋問しましたか。』

『へえ。』

『へえじやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか、我家の坊様の事を聞いくらひならお使に行つて何の役にたちます。』

『でも奥様が只だ片山の坊様と大村の坊様が歸宅つたか聞いて来いとお仰いましたから、それで……。』

『そう言ひましたとも、けれど何故我家の坊様はと言訊くことが出来ません。』と白眼つけて、直ぐ奥に向て

『眞實に貴方心配ですから、御自分で一寸と聞いて来て下さいませんか。』

夕闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をパタリ／＼

『まアお前のやうにワイ／＼騒いだつて仕様がないう。必定寄道でもしたのだから、今に歸宅つて来るよ。』

『貴方もそんな呑氣な事はかりおつしやつて萬一の事があつたら如何なさいます。』

『萬一の事とはどんな事だ。』

『萬一のことゝは萬一の事です。』

『我家の事が水へでも陥つたと言ふのだらう。』

『さうですとも。そんな事が無とも限りません。連件が少年のことですから驚いて逃て来て知らん顔をして居るなんて、よく東京でもあるぢやアありませんか。』

『そんな馬鹿々々しいことがあつて堪るものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場處の模様を知らないから、そういうこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものがない、だから落ちよう

がない。よしんば落ちたにしても足をのめりこまず位のもので決して生命に彼はある筈がないのだ。必定、寄道を爲て居るのだよ。』といはれて乙なことがおつしやると言ひたそうな身構をして東京の奥様『堤があるか無いか、昨年来たばかりの私にはお國の事は存んじませんが、もしか貴方が。斷て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて来て頂くわけに参りませんか知ら。片山の坊様でも我家の時が寄道を爲たのか池に陥つたのか位は知て居なさる筈ですから。』と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの、

『お前が心配するのだからお前が聞にゆけば可ぢやアないか』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥様、私参ります。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに頼むと安心が出来ません。』

『いゝえ、私が参ります。』

『うるさいねえ。兩人で行つたら可いだらう。』と父の一聲。母親とお光は申しあはしたやうに沈黙つて了つた。そして、こそ／＼兩人は外方に出掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時は平時この道から歸るか。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に奥様を残してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙霞をこめて蓮池の香り高き處に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が歸つて來て。

『奥様矢張坊ちやんは居残りなんだそうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まあ何といふ兒だらう、田舎道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて来ないなんて……』

『今にお歸りになりますよ。』とお光は奥様の泣き出しそうな聲を聞て慰める。奥様は無言で蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居たが、

『お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は『若しか』といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待つて居ると、間もなく蓮池の邊に小さな影が見えだした。だん／＼近いて来るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒かも知ぬと心も空に見つめて居ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら来るのは正しく時之助である。

『時じやアありませんか』といふ一刹那、悲變じて喜となる。

『ヤア、母様其處で何を爲て居るのです。』

『まあ此兒は。何を爲て居る所じやありません。お前こそ斯んなに遅くまで何をして居たのです。』といふ時、喜變じて怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』